

ユリシーズの秩序論

御 興 員 三

「チェインバーズ英文學百科事典」の一九〇一年版でシェイクスピアの「トロイラスとクレシダ」の項を引いてみると、一幕三場の、例の有名なユリシーズの秩序論^①が、全文六十三行にわたつて引用されている。それは、この戯曲の解説に割りあてられたスペース全體の、ほぼ三分の二を占め、あたかも、ユリシーズのこの演説がこの劇作品のすべてでもあるかのような觀を呈している。執筆者はサー・シドニー・リーである。

ところが一方、同じ人の筆になる「シェイクスピア傳」(二八九八年初版發行)を見ると、この演説は、他の場面においてユリシーズの行つた議論と一括して、簡単に論評されているに止まり、引用は一行もされていないことに氣がつく。

兩者のあいだに見られる、扱いかたのこのような相違は、後者が専門的な學術書であるのに反して、前者のねらつた讀者層は専門家ではなく、廣く一般の讀書大衆であつたことに由來するものと考えられる。

「トロイラスとクレシダ」を讀んだことも觀たこともない人でも、ユリシーズのこの演説のことは知つている。そういう人たちが百科事典をめくるとき、さいわいこの演説に遭遇すれば一種の満足感を味わうであらうし、逆に、この演説を見いだしえなかつたら、失望するであらう。彼らにとつては、ユリシーズの演説が「トロイラスとクレシダ」を代表するからである。「チェインバーズ」においては、あるいは、こういう事情が考慮された結果、ユリシーズの秩序論にそれほ

ど大きなスペースを割くことになつたのではなからうかとさえ思われる。それは、おそらく、うがちすぎた想像であらう。けれども、そんなせんさくもしてみたくなるほど、この一節が古來人口に膾炙していることは事實である。

そしてまた、上のように想像することは、かならずしも、編集者あるいは執筆者が一般の嗜好に迎合して、ユリシーズのこの演説に不相應な重要性を與えたということにはならない。「チェインバーズ」は、解説を少なくし、本文をできるだけ多く盛りこむことによつて、讀者にファースト・ハンドの知識を與えることを心がけている。「トロイラスとクレシダ」のなかから、名言佳句のたぐいではなく、相當の長さをもち、内容的にも一應まとまりがあり、表現もすぐれている箇所を一つだけ擧げるといふことになれば、誰しもこのくだりを選ぶであらう。たしかにこれは名演説の名を辱しめない。比喩、類推の巧妙にして豊富なことはいうまでもなく、ことにみごとだと思われるのは、切り出しと締めくくりの巧みさである。攻城七年に及んで、いまだに陥落しないトロイを前にして、善後策を議するために開かれた、ギリシア軍の評定の席上、ユリシーズは特に發言を求めて言うのである。

Troy, yet upon his basis, had been down,

And the great Hector's sword had lack'd a master,

But for these instances :

The specialty of rule hath been neglected ... (II. 75—8)

「トロイいまだに陥落せず、ヘクターの首足處を異にせざるゆえんは、ほかでもありません。」そこまで言つて、あと半行分の沈黙が来る。もちろん意識して言葉を切つていたのであつて、眼は一座を眺め渡しているであらう。聴くものの好奇心をそそり、注意を集めんがための、技巧的な沈黙である。そして、ようやく好奇心が高まり、注意が集まると見るや、「統帥の大權がないがしろにされております」と、肝心の點を、一氣に一行で言い放つ。心得切つた演技といわな

ければならない。同様に巧みな半行の使用は、一二六行目にも見られる。

Great Agamemnon,

This chaos, when degree is suffocate,

Follows the choking.

(Il. 124—6)

「アガメムノン閣下、秩序が窒息するにおいては、かくのごとき混乱が襲うものであります、その窒息のあとを。」窒息(choking)という言葉そのものが、あたかも、実際に話し手を窒息させたかのように、それきり言葉が途切れる。呼びかけられたアガメムノンはもとより、居並ぶ將星のことごとく、ここでは息が詰まる思いをするに違いない。締めくくりの要領もまた、心得たものである。

To end a tale of length,

Troy in our weakness stands, not in her strength. (Il. 136—7)

「これを要するに、トロイのいまだ落ちざるは、彼強きがゆえにあらざして、我弱きがゆえであります。」言葉は平凡だが、平凡なほうが、この場合實際的效果がある。「どんなに愚鈍な軍人でも、韻をふんだこの締めくくりの二行だけは會議の席から覚えて歸るだろう」という評は、たしかに、まどを射ている。

このようにして、このユリシーズの演説は技巧的には完璧に近い。それでは、内容的、思想的にはどうであろうか。ここに盛られている思想は、要約すれば、大にして天體の運行、小にして人間社會の存續の根本原理は、秩序尊重、階級嚴守にありとするものである。

一七六五年に、ジョンソン博士が、ここに現われた思想とリチャード・フッカー(Richard Hooker)の「教會行政法論」(Of the Lawes of Ecclesiastical Polity, 1597)のなかに見られる思想との類似性に着目し、シェイクスピアはこの一節を

フッカーに負つていふという説を提起して以來、多くの學者によつてこの一節の思想的根據を探る作業が行われた。その結果は、聖書、ホメーロス、プラトーンに始まつて、ウエルギリウス、キケロ、オウィディウス、チヨースー、スペインサー、ラブレール、サー・トマス・エリオット(Sir Thomas Eliot)等に及ぶ、老大な文獻が擧げられた。けれども、それらのうちどれ一つとして、それだけで、たとえば「アントニーとクレオパトラ」のある部分とノースの「ブルーターク」とのあいだに見られるものほど、直接的で顯著な類似性を持つものはない。ということは、この一節の思想は、シェイクスピアがある特定の思想家、作家から學んだというような種類のものではなくて、實は、發するところ、はなはだ古く、及ぶところ、はなはだ廣い思想であつたこと、シェイクスピアも含めて誰でも、いつ誰から學ぶということなしに、おのずから身につけた種類の思想であつたことを物語るものにはかならない。非個性的な、その意味で平凡な思想だつたのである。非個性的な思想というと、あるいは異論が出るかもしれない。この一節は、シェイクスピア個人の人生觀を示すものとして、從來しばしば引用されてきたものだからである。しかし、非個性的であるということは、シェイクスピアもその思想を分かち持つていたことを、かならずしも否定するものではない。血で血を洗うバラ戦争の混亂に懲りたエリザベス朝時代の人びとにとつて、秩序尊重の思想は、その人生觀、世界觀の根柢をなすものであつたことは、E・M・W・テイリヤード博士等の指摘するとおりであろう。^⑨シェイクスピアもまた、そういう考えを持つていたとしても、なんら不思議はない。けれども、問題は、シェイクスピアがそういう思想を抱いていたかどうかということよりも先に、その思想を彼は作品のなかで、どのように扱つていふかということではなからぬまい。

總じて、古くから存在し、廣く行き渡つた、その意味で平凡な思想ほど、殊にそれが巧妙な表現を與えられている場合、よく人の記憶にとどまり、折にふれ好んで人の引用するところとなる。そこで、ある作品のなかに、たまたまそのような一節があると、とかくそれは、それが置かれていふ前後關係から抜きだされ、獨立して人口に膾炙する結果になりやすい。

ユリシーズの秩序論もまた、その例外ではない。「ユリシーズの秩序論は、この問題に關する作者の最後の見解を表明するものとして、あまりにも引用されすぎた。少し休憩を興えるべきである」というような聲のあがるゆえんである。休憩を興えるのには賛成であるが、その前にまず、もとのコンテクストのなかへ返すことが必要であろう。

もとのコンテクストへ返すについては、しばしばユリシーズの秩序論の引きあいに出されるキャンタベリーの大僧正の議論の場合^①を、併せ考えるのが便利である。ヘンリー五世は、フランス遠征の決意は固めつつも、留守中スコットランドからの侵入をおそれて、踏み切りかねている。キャンタベリーの大僧正は、そのような王の氣持を忖度した上で、出でて戦うも、内に守るも、それぞれの職分である、われわれがミツバチの世界に習い、その置かれたる位置のいかんを問わず、王の心を心とし、一切の行爲を擧げて國威の發揚に歸一せしむるならば、たとえ外敵の侵寇を見ようとも、なんら恐るるに足らぬ、安んじて遠征に就かれるがよい、と勸める。もし、この一節から思想を抽出するならば、それはユリシーズの演説に見られると同様の秩序尊重の思想である。そこで、多くの學者はここにもまたシェイクスピアの秩序尊重の思想が現われているとする。はたしてそうであろうか。

マーク・ヴァン・ドレーンは「ヘンリー五世」の文體をもつて、修辭過多で内容空虚であるとする。その一例として、おびただししい數にのぼる、同義語の無意味な反覆を指摘し、三十對以上の例を擧げているが、そのなかには大僧正の秩序論の四行目に出てくる「目的あるいは目標」(aim or butt)という修辭も含まれている^②。ところで、「ヘンリー五世」の文體をこゝういふふうに見ることは、古來かなり一般的であつたところの、この作品をもつて偽善者の芝居とする見解と無縁ではないように思われる。そういう見解によれば、キャンタベリーの大僧正の演説は、教會領沒收法案の議會通過を回避し、あるいは遷延せしめんがために、王を煽動して外國と事を構えさせようとした詭辯であるという。そう思つて讀めば、たしかにそれも讀めるほど、この演説には粉飾が多い。けれども、そう解することはこの作品を根本的に誤解することであろう。

この戯曲は、ジョン・ドウヴァー・ウィルソンの力説するように、勝利の記録である。暗いバラ戦争のなかに開かれた、一つの明り窓である。さらに、グロウプ座の劇場開きのために書きおろされた、めでたい芝居である。M・C・ブラッドブルックの言葉を借れば、これは一つの「祝祭であり、パジェント」である。とすれば、そこに世界観を求めたり、詐術を探つたりするのは、そもそもお門違いではなからうか。キャンタベリーの大僧正の言葉は、ヘンリー五世をして後顧の憂いなく勇躍征途にのぼらしめんがための飛び板の役目をつとめているのである。それ以上でもなく、それ以下でもない。粉飾が多いのも、勝ちいくさへの門出であつてみればやむをえまい。事の成るに先立つて、お祝いの言葉を述べているに等しいのであるから。

ユリシーズの秩序論は、しかるに、それとは趣を異にする。ヴァン・ドレーンは、ここにもほぼ同じような徴候を發見し、「トロイラスとクレシダ」の文體は、一般に「騷騒しく、見かけ倒しで、なげやり」であるとし、問題のユリシーズの演説は「大言壯語」であると評する。④「ヘンリー五世」の文體を空疎な饒舌と見たヴァン・ドレーンは、この戯曲のシチュエーションが、ある程度饒舌を許容し、あるいは必要とする性質のものであることを見落したのが難であつたが、その文體感覺そのものは、まとははずしてはいなかつた。「トロイラスとクレシダ」にたいする彼の評言についても、その文體感覺は、尊重されなければならないのではあるまいか。テイリヤード博士のごときも、ヴァン・ドレーンの「なげやり」だという評語には反對し、文體は全體を通じてきわめて「慎重」であるといひながら、しかも、ユリシーズの秩序論をもつて、ただちに作者シェイクスピアの眞剣な見解とすることにも反對であつて、作者は、ここでは「いくらかは、かげで舌を出している」と見ている。⑤嘘があるのは、キャンタベリーの大僧正の場合ではなくて、むしろこのユリシーズの場合ではなからうか。そもそも、一幕三場におけるユリシーズの演説の眞のねらいは、アキリーズの怠慢を責めるにある。アキリーズの懈怠、わがまま勝手な戰場離脱こそ、全軍の士氣弛緩の根本原因であることを指摘し糺弾するにある。人生觀や世界觀の開陳な

どということ、それがユリシーズのものであろうとシェイクスピアのものであろうと、あるいはその他誰のものであろうと、それ自體が目的ではない。彼の秩序論は、アキリーズ彈劾のための前置きに過ぎない。ただ、その前置きはなほ雄大なものである點に、問題がひそんでいる。

ユリシーズは、「症狀は明らかとなつたが、療法は如何」というアガムノンの言葉に促されて、いよいよ本論であるアキリーズ彈劾に移る。それによれば、アキリーズが戦いを怠り、終日テントに寝そべつて、アガムノンをはじめ幕僚の諸將を嘲笑して快をむさぼつてゐるのは、ひとえに彼の、己が勇武と聲望に酔つた、慢心の結果にほかならないという。それでは、その慢心を矯める「療法」として、ユリシーズに、はたしてどのような具體策があつたかは、まつたく不明である。というのは、ユリシーズの演説が結論に入らないうちに、トロイから軍使が到着し、ヘクターからの一騎打ちの挑戦が傳えられるからである。ユリシーズはこの偶然に便乗して、アキリーズの慢心を懲らしめる計略を思いつく。ヘクターの挑戦は、それとは名指さね、暗にギリシア軍切つての豪勇アキリーズに向けられたものであることは、衆目の見るところ明らかである。にもかかわらず、策をめぐらすことにより、わざとアキリーズをさしおいて、エイジャックスをヘクターの相手として選び出すならば、一石二鳥の得がある。自分をさしおいてエイジャックスが選出されたことだけでも、アキリーズの自惚れは打撃を蒙るであらう。加うるに、エイジャックスがヘクターを打ち負かすようなことにでもなれば、アキリーズの聲望はエイジャックスのそれのかけに隠され、アキリーズにとつては願つてもない良い薬になるであらう。また、エイジャックスが敗けた場合には、ギリシア側にはなおアキリーズという敵味方ともに認める切り札が残つてゐるのだから、エイジャックスの敗北は、ギリシア側の決定的な敗北を意味しないことになつて、これほど結構なことはないというのが、ユリシーズの考えである。

なるほど名案である。ただし、田舎政治的な名案である。彼の秩序論は大所高所よりする堂堂の議論であつたが、その

同じひとが實際に取らんとする手段の、何と姑息で卑俗なことであろう。われわれは、まず、そのコントラストのいちじるしさに注目しなければならぬ。

しかも、その術策が所期の効果を擧げるのであれば、いわゆる實際政治の名のもとに、その姑息性、卑俗性も許容されるかもしれない。ところが、ユリシーズの策略は、結局、なんら效を奏さなかつた。ユリシーズは、エイジャックスがヘクターの相手として選ばれた結果アキリーズの人氣は急激に下落したことを思いしらせて、アキリーズの名譽心を刺戟し戰意をかきたてようと考え、將軍たちに命じて、アキリーズにたいし、にわかによそよそしい態度を示させる。アキリーズがこれを見て、いぶかしく思っているところへ、ユリシーズが訪れ、かつての戦功を頼んで、いつまでも人氣が持續すると思つていたら間違ひであること、世間は忘れつばいから、かつての名譽を維持しようと思ふならば、一刻の怠りがあつてもならないこと、それでないと、いつ誰に先を越されても文句はいえない道理であることを説き、暗にアキリーズの奮起を促す。アキリーズは、やや心を動かされたようであつた。しかし、やがてまた、もちなおして、ユリシーズが期待したほどの反應はなかなか示さない。そこでユリシーズは、いよいよ、とつておきの切り札を持ち出す。アキリーズがトロイの王女ポリクシーナと戀仲であり、そのため敵によしみを通じている祕密を、當のアキリーズに向つて暴露するのみか、傷に鹽をすりこむようなことを言ふ。

... it must grieve young Pyrrhus now at home,

When fame shall in our island, sound her trump,

And all the Greekish girls shall tripping sing

“Great Hector's sister did Achilles win;

But our great Ajax bravely beat down him”.

(III. iii. 209—13)

「國で父御のお歸りを待つておいでの御息が、この噂を聞かれたら何とお思いだろう。アキリーズは、あわれや、ヘクターの妹にしとめられたが、エイジャックスは、あつばれ、ヘクターを討ち取つたと、娘の子らは踊り囃すことでしょう。」アキリーズには、これが一番こたえた。單にエイジャックスに遅れをとるというおそれだけでは、まだ起たなかつたアキリーズも、弱みをにぎられえぐられる屈辱感には、いたたまれず、一たんは立ち上ろうとする姿勢を示す。しかし、動機が動機であるから、立ち上ろうとするその姿勢は、いかにも弱弱しく、腰がきまらない。自分で自分の心が分からないと言ふ。

My mind is troubled, like a fountain stir'd;

And I myself see not the bottom of it. (II. 311—2)

だから、ポリクシーナからの贈物を添えて、その母親へキュバから、戦いから手を引く約束をどうぞ守つてくれるようにという手紙が一本届くだけで、すべてはもとの木阿彌である。かくして、ユリシーズの高邁な理想論は、まず、卑俗な術策に墮落し、しかも、その術策はなんらかの効果をも生まない。ユリシーズの秩序論は、結局、ネズミ一匹出てこない鳴動に終るのである。

口の悪いサーサイティーズにかかると、ユリシーズは“crafty swearing rascal”であり、“dog-fox”ということになる(五幕四場)。“swearing”という言葉については諸説があるが、わたくしは「誓つてとか、断じてとかいう言葉を好んで用いる」という意味に解するディールマス(Delius)の説^①を採りたい。そうすると全體は「口では偉そうなことをいつているが、油断も隙もならない悪黨」というような意味になる。“dog-fox”というのも、單に「牡狐」ではなく、「ずる狐」という意味であろう。サーサイティーズはユリシーズを狡猾の權化と見るのである。サーサイティーズは道化である。この場合、その言葉をもつて、ただちに作者の見解を語るものとすることはできない。けれども、ユリシーズの言動をあま

り額面どおりに取りすぎる弊にたいしては、サーサイティーズの悪口はあつらえむきの解毒劑になる。シェイクスピアも「ルクリース」のなかでは、ユリシーズの頭に「狡猾な」(wily)という形容詞をつけて呼んでいた(二三九九行)。「賢明な」ユリシーズは、すでにシェイクスピア以前の時代から、「狡猾な」ユリシーズに墮落していた。シェイクスピアも、一應その傳統の中にあるものであることを忘れてはならない。

けれども、「トロイラスとクレシダ」におけるユリシーズは、ことさら狡猾にえがかれていようには、わたくしには思われない。五幕二場、トロイラスがクレシダの裏切りを見せつけられる場面におけるユリシーズは、トロイラスにたいして、親身のような理解と同情を示す。したがつて問題は、狡猾かどうかというような、「性格」の問題ではない。狡猾であろうとなかろうと、そういうこととは無關係に、一般に人間の、頭で考えることと口で言うことと、口で言うことと實際に行うこと、行爲の目的とその結果、それらのあいだの矛盾撞着が問題なのである。

そのことは、ヘクターの場合を併せ考えてみると一そう明らかになる。一幕三場のギリシア軍の評定と、二幕二場のトロイの御前會議の兩場面は、相照應するように仕組まれたものであることは明らかである。そして、トロイ側の會議において、ギリシア軍の會議におけるユリシーズに相應する役を果たすのはヘクターである。ヘクターは、人妻であるヘレンを、たとえ本人の望みであるにせよ、トロイにこのまま止めておくのは、人間自然の理に反する、ギリシア側の申し入れに従い、すみやかにギリシアに返して、和を結ぶべきであると主張する。ところが、トロイラスは兄の説に眞向から反對する。この場に及んで、理がどうの、道がどうのというのは迂遠もはなはだしい、いまさら何の面目あつてヘレンをギリシアに引き渡すことができよう、ことはトロイの名譽に關する問題であるといきまぐ。全體として、ヘクターの説くところは、すじが通つてゐるのにたいし、トロイラスの論法は、論理を無視しがちな感情論である。しかるに、その正論を吐くヘクターが、自分の考えはあくまで正しいがといひながらも、結局はトロイラスにくみして、ヘレンを引き留め、戦争

を續行することに賛成してしまふ。トロイラスの説くところに賛成して、あくまでヘレンを護つて戦うというのであれば、それでは、よほど意氣に感じ名譽を尊重する人物かと思うと、實際の行動は必ずしも芳しくはない。例えば、結果的には命取りとなつた、彼のけちくさい物慾がその一例である。ヘクターは戦場の混亂のさなかに、ギリシア軍のなかに一きわ美しい鎧をまとつたもののあるのに目をつけ、鎧欲しさにその男を斃す。そして、その場で着換えようとしたのかどうか、ともかくおのれの鎧をぬいで一息入れているところをアキリーズに襲われて、あえない最期を遂げる。そういう隙に乗ずるアキリーズもアキリーズであるが、ヘクターのほうも、かえりみて恥じざる状況ではない。御前會議における彼の堂堂たる正論と、案外な腰くだだけ、そして、この遺憾な死にざまとのあいだには、埋めがたいギャップがある。そのギャップは、先にユリシーズの場合に見た、思想と行動とのあいだの矛盾撞着と本質的にはなんら變るものでない。

矛盾撞着はこの劇の主人公トロイラスの場合にも顯著である。一幕一場において、われわれはトロイラスが、ヘレンのためになど馬鹿馬鹿しくて戦えるかと惡態をついたその口の下から、戰場に馳せ參じるのを見る。さらに、御前會議の席上では、一幕一場のセリフを忘れたかのように熱烈なヘレン擁護論を吐くのである。

テイリヤード博士は主人公のこの矛盾を——あるいは矛盾ではないかもしれないがという留保つきで——この作品の唯一の缺點とする^④。缺點であるかどうかは別として、矛盾はあきらかな矛盾であることを認めなければならない。そして、その矛盾は、博士の試みたように、トロイラスの氣分が非常に變りやすい状態にあつたのだとか、あるいは、トロイラスは一幕一場の場合「性格を離れて」作者の代辯を勤めさせられているのだとか、^⑤そういう方向に解決を求むべきではあるまい。むしろ矛盾こそこの作品にえがかれたトロイラスの本質ではあるまいか。トロイラスは、最初の求愛のとき、クレシダに向つていう。

This is the monstrosity in love, lady, that the will is infinite, and the execution confin'd; that the desire is boundless,

and the act a slave to limit.

(III. ii. 87—90)

「戀とは奇怪なものです。思ひは無限だけれども、爲し得ることには限りがある。」また、クレシダの裏切りを、まのあたり見せつけられたトロイラスは呻くように言う。

... this is, and is not, Cressid.

Within my soul there doth conduce a fight

Of this strange nature, that a thing inseparate

Divides more wider than the sky and earth ;

And yet the spacious breadth of this division

Admits no orifex for a point as subtle

As Ariachne's broken woof to enter.

(V. ii. 146—52)

「あれはクレシダであつてクレシダではない。私の胸は戦場だ。そもそも分かつべからざるものが、天と地よりもなお廣く離れ、しかも、その廣かるべきあいだには、切れたクモの糸の先を入れるほどの隙もない。」

このようにみれば、矛盾や蹉跌こそこの作品のテーマではないのであろうか。エリス・ファーマー教授は、さらに一步を進めて、この作品の内容は混沌こそ人間存在の究極的事實であることを主張しているものであるが、それが絶妙の藝術的手腕によつて「フォーム」を付與されたがために、實は秩序こそ究極的事實であることを、この作品は、意識せずして、より深いところで證明する結果になつていと説く。^④

わたくしには、そこまで行く勇氣はない。この作品にあらわれたシェイクスピアの技巧が絶妙の藝術的手腕と呼ぶにふさわしいものであるかどうかにも疑問があり、また、シェイクスピアはこの作品において、人間存在の究極的事實は混沌

であると主張しているとも思えない。シェイクスピアはこの作品において、矛盾、撞着、蹉跌、分裂、混沌というような人間生活の一面を、それに如何なる解決をも與えることなしに、そのままの姿で芝居に仕組んでみようとしたのではないかと思う。このような試みは、一步誤れば、作品自體、形を成さなくなつてしまふであらう。シェイクスピアが、この作品において、よくその危険を避けえているかどうか、わたくしには分からない。ただ、そのような試みは、作者の前進のために、行われなければならないかつた試みであり、また、いつの世にも繰り返されなければならない試みであることを信ずるのみである。

註

(1) 「秩序」は原文では“degree”である。もと「階段や梯子の段」を意味し、轉じて「階級、秩序」等を意味するようになったもの。なお、參照の便のために、秩序論と呼ばれる全文を次にかけておく。(シェイクスピアからの引用は、すべて Peter Alexander 氏の“Tudor Edition”, 1951 年)。

Troy, yet upon his basis, had been down,
And the great Hector's sword had lack'd a master,
But for these instances:
The specialty of rule hath been neglected;
And look how many Grecian tents do stand
Hollow upon this plain, so many hollow factious.
When that the general is not like the hive,
To whom the foragers shall all repair,
What honey is expected? Degree being vizarded,

ユリシーズの秩序論(御覽)

Th' unworthiest shows as fairly in the mask.

The heavens themselves, the planets, and this centre, 85

Observe degree, priority, and place,

Iustiture, course, proportion, season, form,

Office, and custom, in all line of order;

And therefore is the glorious planet Sol

In noble eminence enthron'd and spher'd 90

Amidst the other, whose medicinal eye

Corrects the ill aspects of planets evil,

And posts, like the commandment of a king,

Sans check, to good and bad. But when the planets

In evil mixture to disorder wander, 95

What plagues and what portents, what mutiny,

What raging of the sea, shaking of earth,

Commotion in the winds! Rights, changes, horrors,

- Divert and crack, rend and detracinate,
The unity and married calm of states
Quite from their fixture ! O, when degree is shak'd,
Which is the ladder to all high designs,
The enterprise is sick ! How could communities,
Degrees in schools, and brotherhoods in cities,
Peaceful commence from dividable shores,
The primogenity and due of birth,
Prerogative of age, crowns, sceptres, laurels,
But by degree, stand in authentic place ?
Take but degree away, untune that string,
And hark what discord follows ! Each thing melts
In mere oppugnancy : the bounded waters
Should lift their bosoms higher than the shores,
And make a sop of all this solid globe ;
Strength should be lord of imbecility,
And the rude son should strike his father dead ;
Force should be right ; or, rather, right and wrong ——
Between whose endless jar justice resides ——
Should lose their names, and so should justice too.
Then everything includes itself in power,
Power into will, will into appetite ;
And appetite, an universal wolf,
So doubly seconded with will and power,
- 100
- 105
- 110
- 115
- 120
- 125
- 130
- 135
- Must make perforce an universal prey,
And last eat up himself. Great Agamemnon,
This chaos, when degree is suffocate,
Follows the choking.
And this neglectation of degree it is
That by a pace goes backward, with a purpose
It hath to climb. The general's disdain'd
By him one step below, he by the next,
That next by him beneath ; so every step,
Exempl'd by the first pace that is sick
Of his superior, grows to an envious fever
Of pale and bloodless emulation.
And 'tis this fever that keeps Troy on foot,
Not her own sinews. To end a tale of length,
Troy in our weakness stands, not in her strength.
(*Troilus and Cressida*, I. iii. 75—137)
- ⑱ Gladys D. Willcock : "Shakespeare and Rhetoric", *Essays and Studies*
by *Members of the English Association*, XXIX (1944). (Quoted by
Harold N. Hillebrand, *Troilus and Cressida*, "The Variorum Shakespeare",
"Appendix", p. 398.)
- ⑳ E. M. W. Tillyard : *The Elizabethan World Picture* (1943) 註°
- ㉑ M. C. Bradbrook : *Shakespeare and Elizabethan Poetry* (1951), p. 259.
Therefore doth heaven divide
The state of man in divers functions.

Setting endeavour in continual motion ; 185
 To which is fixed as an aim or butt
 Obedience ; for so work the honey bees,
 Creatures that by a rule in nature teach
 The act of order to a peopled kingdom.
 They have a king, and officers of sorts,
 Where some like magistrates correct at home ;
 Others like merchants venture trade abroad ;
 Others like soldiers, armed in their stings,
 Make boot upon the summer's velvet buds,
 Which pillage they with merry march bring home
 To the tent-royal of their emperor ;
 Who, busied in his majesty, surveys
 The singing masons building roofs of gold,
 The civil citizens kneading up the honey,
 The poor mechanic porters crowding in
 Their heavy burdens at his narrow gate,
 The sad-ey'd justice, with his surly hum,
 Delivering o'er to executors pale
 The lazy yawning drone. I this infer,
 That many things, having full reference
 To one consent, may work contrariously ;
 As many arrows loosed several ways
 Come to one mark, as many ways meet in one town,

ハルニーズの秩序論(御覽)

九二五

- As many fresh streams meet in one salt sea,
 As many lines close in the dial's centre ;
 So many a thousand actions, once afoot,
 Bind in one purpose, and be all well borne
 Without defeat. Therefore to France, my liege.
 Divide your happy England into four ;
 Whereof take you one quarter into France,
 And you withal shall make all Gallia shake.
 If we, with thrice such powers left at home,
 Cannot defend our own doors from the dog,
 Let us be worried, and our nation lose
 The name of hardness and policy. 220
 (Henry V, I. ii. 183—220)
- ㉔ Mark Van Doren : *Shakespeare* (1939), pp. 172—3.
 ㉕ John Dover Wilson (ed.) : *King Henry V*, "The New Shakespeare",
 "Introduction", pp. xviii—xxiv.
 ㉖ M. C. Bradbrook : op. cit., p. 206.
 ㉗ Mark Van Doren : op. cit., pp. 202—3.
 ㉘ E. M. W. Tillyard : *Shakespeare's Problem Plays* (1950), p. 55.
 ㉙ *Troilus and Cressida*, "The Varionum Shakespeare", p. 296 note.
 ㉚ E. M. W. Tillyard : *Shakespeare's Problem Plays*, pp. 53—4, 84.
 ㉛ *ibid.*
 ㉜ Una Ellis-Fermor : *The Frontiers of Drama* (1945), pp. 72—3.